鐵と鋼　第九年第一號　大正十二年一月廿五日發行

印度號

印度事情

行方畝三郎

我國と印度とは古來學術、宗教其他に於て密接の關係ありしが、歴史上よりして印度に起源を有する佛教は、八世紀に支那、朝鮮を經て我朝に傳はり、日本の文化に貢獻すること多大なるものあり。

更に現時の通商貿易上の關係に於て特に深きものあり、即ち印度産の棉花は實に我輸入品の大宗にして次はビルマ産の米等なり。

我國より輸出さるゝ主なるものは絹、綿織物等なり、之れ等は土人の需要旺盛にして輸出高も年々增加し、今や輸出入總額三億圓を超へたり。

一、印度の地勢

印度は南方亞細亞に位し、ビルマ、セイロン島等の島嶼を合せて、其面積壹百八拾萬方哩(歐露と同じ)人口は三億壹千五百萬人に達し、英國領土中最も重要なるものなり。

北方に有名なるヒマラヤ山あり、高さ貳萬尺の大山脈が壹千五百哩に亘りて支那及び亞富汗斯坦との境をなし、四時雪を頂き峻嶺にして登攀すべからず、探險者も殆ど稀なり。

山麓一帶は氣候概して、溫和にして盛夏の候は在留の英人等は多く此處に集まり、シムラ、ダージリン等の都會は避暑客を以て滿たさる。

西方に流るゝインダス河と東に走るカンヂス河及びプラマプートラ河の流域に屬する平野は、植物繁り農業開け交通も亦た發達し大小の都會茲に散在し、人口は稠密して印度の富の大部分は實に此地方より産出するものなり。

南部にあるデカン高原は半島の半を占め海拔壹千尺乃至壹千五百尺あり、ゴタバリ及びキストナの兩河ありてベンガル灣に注ぐ。

印度の面積及び人口は左の如し。(島嶼を除く)

年次	面積	人口	年次	面積	人口
一八七一年	八六〇〇〇〇方哩	一九六、八四百萬人	一九〇一	一〇九〇、九一〇	二三一、六一
一八八一	八七三、一八六	一九、九、二〇	一九一一	一〇九三、〇七四	二四四、二七
一八九一	九六四、九九三	二一一、三八	一九二一	一〇九三、〇七四	二四七、一五

二、印度の歴史

印度は古代文明國の一つなるが、其歴史は外國の爲めに征服せられたる歴史にして、一の民族が侵入して征服すると、又他の民族が來りて之を征服すると云ふ樣に太古に於けるアールヤ族、中世紀に於ける回教徒、近代の英吉利人等即ち之れなり。

四千年前にアールヤ人種は、ガンヂス河の流域に移住し來り土人を征服して小邦を建設せり、而して此頃既に社會階級も成立して僧、武士、平民、奴隷の區別をなし、僧級の婆羅門が權力を專らにしたりしが、武士階級の一たる釋迦種より紀元六百年の頃釋迦牟尼、即ち王子喬答摩悉達出でて大に佛教を說きて一切衆生の平等を稱へ、忽ち多くの歸依者を生じて婆羅門の勢力は爲に挫けたり。

此當時の印度の文明は實に粲爛たるものありしが爾來屢々外敵の侵入を蒙り、就中回教徒の征服が最も遽しく、從つて其勢力も甚大にして、當今もデリー、アグラ、アーメダバッド等の都邑には多くの回教徒の殿堂存在し、尙國內のみに七千萬人の信者あり。

西歴一千六七百年代歐洲諸國が殖民地獲得に努るに至つて印度は歐洲人の手に落ち、最初は葡、蘭、英、佛等相次で侵入し來りしが葡、蘭二國人は頓て勢力を失ひ、次で英と佛とが激甚に競爭したるが、英人の奮鬪努力により、遂に英國の有となれり。

然して此印度征服は一に英人の設立したる東印度會社の力にして、同會社は壹千六百年に資本金七萬磅を以て英國に創立され、喜望峯より南阿ケープタウン迄の通商權を得て該地方の國々と條約を結び、又英政府よりして交戰權を附與せられ、進んで印度に來り開拓に努めしものなり。

十八世紀の頃よりして、印度モーガル帝國は國內大に亂れ瓦解を來したり、得たり賢しと東印度會社は其機に乘じて要地を占領したるものなるが、之より先き當時の英國政府は餘り喜ばずして異議を唱へしが、印度會社の社員等は之に從はず斯くて其後英人クライブ及びヘスチングス等の力に依り着々領土を擴張し、一七八〇年の代に至り本國政府に監督官を置かれしが、遂には政權を東印度會社より政府の手に移して公然統治する事になれり。

斯くて一八五八年印度土民叛亂の結果として、モーガル王朝は亡び、ビルマ王國其他多數の土人國を滅し、全印度は大英國の版圖に歸し、一八七七年より英國の皇帝を印度皇帝と戴くに至れり。

先年歐洲の大戰に、印度人は出征し勇敢に西部戰場に於て戰ひ大に英本國を援けしを以て、其報酬として完全に自治を許されん事を印度國民議會が本國政府に請願したり、然して政府は其請を容るゝ意見ありしが、印度に於ける英人等は極力之れに反對せり、當時印度事務大臣は態々印度に來り實地を視察して歸りしが其儘になれり、之れ現在の狀態なり。

三、印度の政治

印度の施政は凡て英國に於ける印度大臣（一九一九年一月初めて印度人を登用し、シンハ卿を次官に任ず）の管掌する所にして、其下に七年の任期を以つて印度事務省に依り任命さるゝ八名以上十二名の委員より成る參事院あり。委員の內少くも九名は、十年間印度に在任し又は居住し、歸國後五年

以上を經過せざるものなるを要する規定なり。參事院は少くも一週一回開會す、一の發議權を有せず、印度の政務に關し英本國に於いて行はるゝ事務の諮詢に應ず。印度の歳入は凡て印度の政務にのみ使用せらるべきものにして、其支出は參事院に諮りて印度事務大臣之を掌る。外國と關係を有する問題、宣戰講和、土人諸邦に對する政府の政策、印度政府より秘密文書として印度事務省に進達し來れる內政に關する事項等につきては、印度事務大臣參事院に諮らず之を處決することを得。最高行政權は印度總督の手に存し、總督は皇帝に依りて任命せられ、通常五箇年を其任期とす。

現總督はリージング伯、俸給貳萬七千磅、一九二一年就任せり其前はフォード卿一九一六年、ハルヂンジ卿一九一〇年、カーゾン卿一八九九年——一九〇五年等なり。

立法權は總督及び兩院より成る議會に存し、一九二一年二月九日を以て其第一回を開きたり、上院は六十名より多からざる議員より成り、下院は百四十四名にして其の議長は總督の任命する所にして、一定の限界內に於て印度に於ける全人民及び土人、州內の臣民に關する法律を制定するものなるが總督は本國議會の同意を得て上院又は下院の希望に反する法律をも定むる事を得る組織なり。

印度の統治に就ては印度總督若しくは之に隷屬する官吏の直轄する諸州と英國の管理の下に世襲する土侯の支配する土侯州とあり、此二つを合したるものが即ち印度帝國なり。

尙此印度內には猫額程の小地域なるが、他國領散在せり、西海岸のゴア、ダマン及びデヱ島は葡萄牙の領にして、東海岸のポンチシエリー及びカリカル等は佛蘭西の領分なるが、今日に於ては唯歷史的記念物として殘存するに過ぎず。

印度土人は古來より酋長を戴き、小王國を成して七百有餘の王ありて何れも英國の主權の下に、王たる名目を有し多少の兵士を養ひ、領內の規則は自ら制定し舊の如く威儀を保持せり、之れを普通に土侯州と呼びなすなり。

一九二一年に於ける州別面積人口左の如し、此外にパンジャブ州の首府たりしデリー處在地〔面積五百五十七方哩、人口十七萬餘人〕を分つてデリー州を置かる。

州	面積（方哩）	人口（千）
アシマー・マーワラ	二、七一一	五〇一
アンダマンス及ニコバース	三、一四三	二六
アッサム	五三、〇一五	六、七一三
バルチスタン	五四、二二八	四一四
ベンゴール	七八、六九九	四五、四八三
ビハー及オリツサ	八三、一八一	三四、四九〇
孟買	一二三、〇五九	一九、六七二
緬甸	二三〇、八三九	一二、一一五
中部地方及バーラー	九九、八二三	一三、九一六
クールグ	一、五八二	一七四
マドラス	一四二、三三〇	四一、四〇五
西北境地方	一三、四一八	二、一九六
パンジャブ	九九、七七九	一九、九七四
聯合地方	一〇七、二六七	四七、一八二
計	一、〇九三、〇七四	二四四、二六七

尙ほ土人の所領に存せる地域左の如し。

邦	面積（方哩）	人口（千）
アッサム	八、四五六	三四六
バルチスタン諸邦	八〇、四一〇	四二〇
バロダ	八、一八二	二、〇三二

ベルゴール諸邦	五、三九三	八二二
ビハー及オリッサ諸邦	二八、六四八	三、九四五
孟買諸邦	六三、八四六	七、四一一
中央印度	七七、三六七	九、三五六
中部地方諸邦	三一、一七四	二、一一七
ハイデラバッド	八三、六九八	一三、三七四
カシュミル	八四、四三二	三、一五八
マドラス諸邦	一〇、五四九	四、八一一
マイソール	二九、四九四	五、八〇六
西北境地方區	二四、四七二	一、六二二
パンジャブ諸邦	三六、五五一	四、二一二
レーヒュタナ區	一二八、九八七	一〇、五三〇
シッキム	二、八一八	七八、九二〇
聯合地方諸邦	五、〇七九	八三二
計	七〇九、五五五	七〇、八八八
印度通計	一、八〇二、六二九	三一五、一五六

四、印度の人種

一口に印度人と云へども多種多樣頗る雜多にして、宗教風俗習慣等の異なる幾多の種族の集りにして、遠く四千年の昔より此印度に移住し東洋最古の文明を貽したる人種はアールヤ族にして、此族の前にはチベット、ビルマ族、マラリヤ族ドラビデアン民族等の非アールヤ人種棲息せり、此外後世に移住せる猶太族、亞剌比亞族あり今之を大別して五種とす。

一、東部ヒマラヤ山ビルマ等に住する蒙古人種。

二、西北境州に住するトルコ族。

三、中部東部南部に住する印度最古民族とアールヤ人種との混血種。

四、西部及び北方に住するアールヤ人種波斯人アラビヤ人種を含む。

五、東部及び南部に住するドラビデアン(印度最古民族)。

尚又言語の大系に依りて此等印度の居住民を分てば大要左の如し。

一、印度土語

(イ)オーストロアシア系	
モンクメール	萬人 〇、五六
マンデー	三、八五
(ロ)西藏支那系	
西藏緬甸	一〇、九三
暹羅支那	二、〇四
(ハ)ドラビヂアン系	六二、七二
(ニ)印度歐羅巴系	二三二、八二
二、其他亞細亞諸國及阿弗利加土語	〇、二二
三、歐羅巴語	〇、三二
四、其他	〇、〇三

五、氣候と生物

ヒマラヤ山等の山地を除くの外は概して暑く三月より六月迄は雨量少くして炎熱酷しく、六月より十月頃迄は雨量多く蒸し暑く、十月より翌年三月頃迄は割合に凌ぎ易し、印度旅行は十一月より二月末迄が最も適し、ヒマラヤ連山に近きシムラ、ダージリン等に行くには四月の初旬より六月の中旬又は九月中旬より十月末迄が宜し。

何れにしても印度の大部は熱帶又は亞熱帶に屬する事とて植物の生長著しく果物蔬菜の類も夥しく、花卉等も珍奇なるもの尠からず、動物は象、虎、豹、駱駝等の獸類、其外鳥類には鸚鵡、孔雀等も多く棲息せり。

六、印度の財政及防備

財政　歳入の主なるものは、地租及び鐵道收入にして一九二一年度の豫算には地租二千二百萬磅及び鐵道收入に壹千七百萬磅を計上せり。

歳出の主なるものは、諸俸給鐵道及び軍事費にして一九二一年の豫算には鐵道事業費二千三百萬磅、軍事費六千六百萬磅を計上せり。

印度の防備　陸軍は英正規兵、土民軍義勇兵及び帝國勤務隊より成り、何れも印度總督の統率する所にして一九二〇年より編成換に着手され、二箇の軍司令部と補助軍令及び印度地方軍令施行せらる、之れに依り義勇兵制度は徴兵制度となり、印度地方軍は正規兵に對し第二線を爲すものにして、國外の勤務には服せらるることなし、帝國軍は土侯州に依り募集し維持せられ、英國士官監督の下に訓練せらる、一九二〇年末に至り完成され七萬五千八百餘人の編制となれり。

七、教育

印度の文化程度は未だ未開の域を脱せず、全人口三億一千三百萬人中の教育程度左の如し。

	總人口	讀み書きし得る者
男子	一六〇、四一九、二二八人	一六、九三八、六六八人
女子	一五二、九九七、七九三	一、六〇〇、七六三

即ち男子にして讀み書きし得る者は十人に一人の割にして女子にして讀み書きし得る者は百人に付き一人の割合なり。

今國内に於ける學校並に學生數を示せば次の如し。

	學校數	男子學生	女子學生
專門學校	二一六	六四、六六七	一、二四九
中學校	八、七〇八	一、一六四、二八二	一一七、五二八
小學校	一五五、三四四	四、九五六、九八八	一、一七六、五三三
特種學校	四、〇九〇	一二〇、一九一	一一、四〇一
私立諸學校	三四、六二三	五二三、〇七六	七〇、三一〇
計	二〇二、九八一	六、八二九、二〇四	一、三七七、〇七一

又、大學は八箇所にあり、左の如し。

	創立年	學生數
カルカッタ	一八五七	一七、四〇九
マドラス	一八五七	(不明)
ボンベイ	一八五七	四、一五二
アラハバット	一八八七	三、三六八
パンジャブ	一八八二	六、五九五
マイソール	一九一六	八七五
プーナ	一九一七	四、一七八
ベナレス	一九一七	(不明)

八、印度の産業

イ、農業

農業は林業、牧畜を併せて之れを業とするもの三億壹千三百萬人中二億二千五百萬人は農業に從事し、然して農業畜産は民を養ふ所の主要産業なるを以て政府並に各州共之れが奬勵指導に力を注ぎ、教育中に於ても農業教育は重要視せられ各地に農學校を有す。

農法は民に資力無きため甚だ幼稚なり、農産物の主なるものは次表の通りにして、米は多く印度河及恒河の流域に産し麥と棉花は中部及び南部に産す。

而して印度に於ける土地は大體左の通り區別せらる。

種別	面積(單位壹千エーカ)	種別	面積(單位壹千エーカ)
既耕地	二二七、八四七	休耕地	四八、四六五

未墾地	一一一、四八五	荒地	一四二、七八二
森林	八六、九二四	灌漑地	四五、八六六

一九二〇年度に於て此等の耕作地より產する農作物の主なるもの左の如し。

種別	作付面積（千エーカー）	收穫高（千噸）
米	七八、〇二三	二八、〇三三
小麥	二五、七二二	六、七〇九
棉花	二一、〇一六	三、五五六
亞麻仁	二、二三四	二六九
雲苔及芥子	四、九一二	八四八
胡麻	四、二九一	三六八
落花生	一、九五一	九三五（單位千噸）
黃麻	二、五〇九	五、九一一（單位千梱）
藍	二三八	〇、〇四〇（單位千ハンドレット）
甘蔗	二、五五三	二、四六五（千噸）
茶	七〇一	三四五、三四〇（千封度）

森林の面積は左の如くにして一九一九年度の國有林の收入は貳百十九萬貳千磅なり。

一九一九年の現在は左の如し。

保存林	一〇三、〇〇三（方哩）
保護林	七、九四一
其他	一四〇、〇〇五
合計	二五〇、九四九

ロ、工業

工業の主なるものは紡績業にして、次は黃麻工業茶等なり綿絲紡績は最初は手織よりして次で水車に依る操業發達し、幾多の小工場は河邊に簇生し支那其他東洋諸國に多く供給せられたりしが、日本及び支那に於ける紡績業の發達に伴ひ販路は一時減退せるも、其後英國の資本の投下により近世的紡績業の勃興を促し、從來の家內工業は遂に大規模の工場組織に移るに至れり、而してボンベー地方は實に其中心地にして國內紡績業の約九割を占めたり。

最近の統計左の如し。

年度	錘數	綿絲產額（封度）	織機數	綿布產額（封度）
一九一九年	六、三五〇、九八八	六、五〇〇、四六四	一、六〇五	三、九四、五八〇、四五〇
一九二〇	六、七一三、二六五	六、三五七、六〇、二四五	一、七、五五八	三、八三、八四六、九三六
一九二一	七、八三一、六五三	六、六〇、〇四二、五九七	一、八、四三四	三、六七、四八二、七九一

次は黃麻工業なり、黃麻は印度の特產物にして其主要產地はベンガル州及アッサム州の恒河とプラマプートラ河の三角洲なり、河川の氾濫は自然に豐饒なる土壤を作り此等の土地に栽培せらる、此工業の中心地はカルカッタなり。

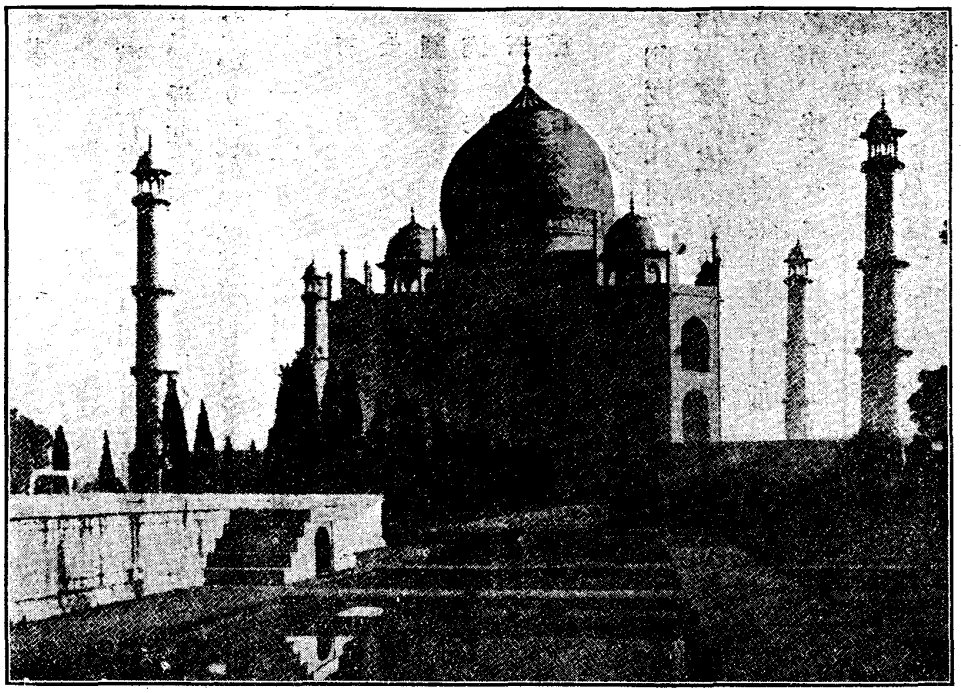
黃麻工業は僅かに六七十年の歷史を有するに過ぎざるも、近年異常なる發達を遂げ、今日栽培面積三百萬エーカーに上り其生產額は黃麻原料及び製品を合して四千萬封度に上れり工場數八十有餘、從業者二十七萬人にして投下資本壹億壹千萬留比と稱せらる。

ハ、商業

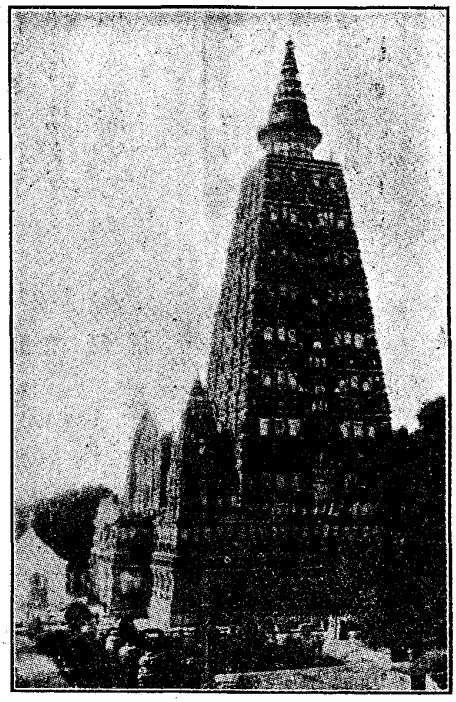
一九二〇年三月末現在會社數は三千六百十八にして、拂込資本金拾貳億三千二百十三萬留比なり。

其內譯左の如し。

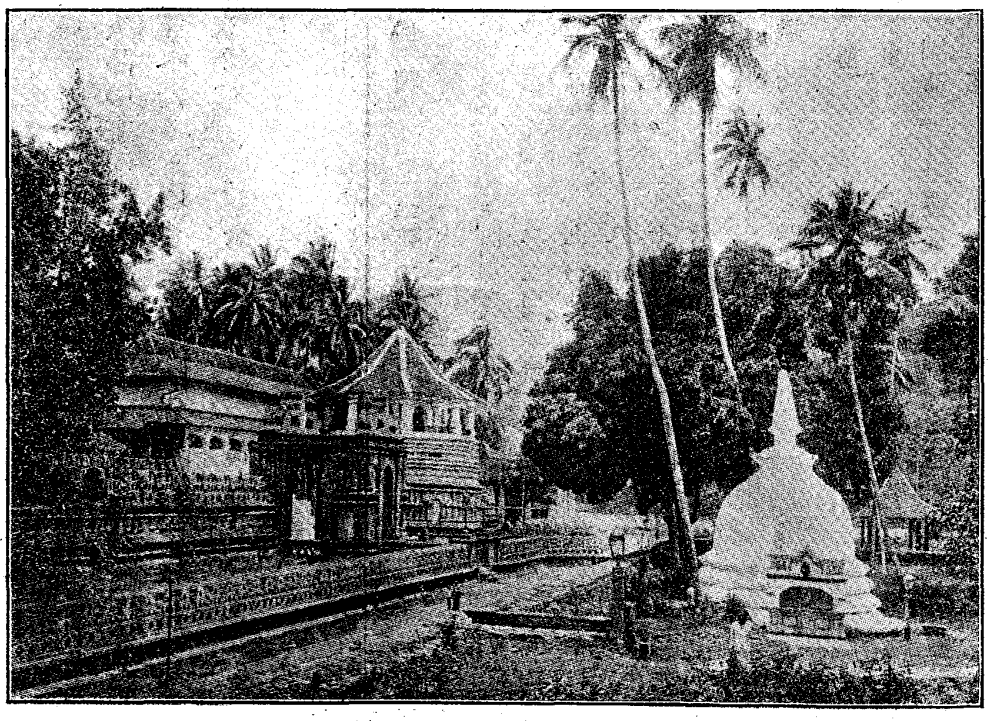
種別	會社數	拂込資本金（萬留比）
銀行及保險	六五四	一〇、一七八
鐵道	五二	一三、六八〇
製茶	三八五	六、八一九
炭山	二三二	七、四〇九
黃麻	五五	一一、六五二



アグラ市のタジマハル靈廟



釋尊成道の地ブタガヤの靈塔



錫蘭島の仙境カンデー

紡績	二四七	一九、七九八
絹毛大麻紡績	二一	二、二三五
綿、黃麻、壓搾	一四一	二、六七八
砂糖	二四	八七三
土地建物	五八	三、六四〇
其外の商業	一、三七七	一二、八一九

二、鑛業

鐵、石炭、金、石油其他各種鑛物の資源は至つて豐富にして、近世に至るまで空しく埋藏せられて殆んど見る可きものなかりしが、最近鑛業法發達して各種鑛產物も次第に增加し、一九一九年の產出高は左の如し

石炭	一〇、一一九（千噸）	雲母	八六三（千噸）
金	二、二五八	硝石	四七一
鹽	一、八二三	鉛	六六八
滿俺	一、五四六	銀	四八七
石油	一、八三四	錫	二四一
重石	五三九	硬玉	一〇八

九、外國貿易

印度の外國貿易は古代は支那及び小亞細亞諸國を相手に陸路商隊に依るものと、地中海沿岸及び喜望峯を迂回する海路よりして、貴金屬並に絹布、象牙、寶石等を販出せしものなるが、後年スエズ運河の開通と海運の發達に連れて貿易は次第に發展し、殊に近代に至りては其廣大なる土地より產する天產物の貿易は異常なる進步を見るに至れり。

最近の統計左の如し。

年度	輸入	輸出
一九一八年	一八八、五六、二四	二五五、二九、二二
一九一九	二二一、七〇、二〇	三二二、七五、七八
一九二〇	三四七、一三、八九	二六五、九三、四七

輸出入品の主なるものにして、一九一九年の貿易額貳千萬留比を超へたるものを擧ぐれば左の如し。（單位千留比）

輸入品種	金額	輸出品種	金額
綿製品	五九、〇七、九二	飲料	四、九〇、〇二
金屬、鑛物	四〇、七五、六九	染料	三、七三、八六
機械類	二二、三七、五七	食料	三、六〇、九六
砂糖	一八、五〇、二九	硝子	三、三七、六一
鐵道材料	一四、一三、〇四	衣服	三、二六、二八
自動車	一二、三四、三二	小間物	三、〇一、八八
金屬品	九、〇八、三八	煙草	二、九五、九一
油類	八、七六、四〇	化學製品	二、六六、一四
紙板紙	七、三〇、三四	鹽	二、二八、一三
絹絲	七、二五、八三	建設材料	二、二五、九九
器具	五、八一、一一	〃	二、一一、二八
毛織物	五、五三、〇〇	〃	

輸出品種	金額	品種	金額
黃麻製品	五二、九五、四六	茶	一二、一四、九七
棉花	四一、六二、八七	皮革	八、四二、〇八
綿製品	一八、二七、一三	樹脂	七、五八、二五
米	一八、二〇、〇八	麥、麥粉	五、八一、九八
種子	一六、八三、四七	鴉片	二、五二、六一
粗黃麻	一六、三六、〇八	羊毛	二、二五、七一

一九一九年及一九二〇年に於ける國別額左の如し。（單位一億留比）

國別	輸入 一九一九年	輸入 一九二〇年	輸出 一九一九年	輸出 一九二〇年
英本國	一〇四	二〇四	九二	五二

北米合衆國	二五	三五	四八	三四
日本	一九	二六	四六	二四
支那	六	五	一九	一五
爪哇、ボルネオ及スマトラ	二一	一七	二	三
白耳義	六	五	九	一二
獨逸	・〇四	四	・〇一	八
海峡殖民地	三	四	七	八
錫蘭	二	一	一〇	一一
佛蘭西	一	三	一五	八
伊太利	一	四	七	六
南米	・〇四	・〇三	八	八
濠洲	三	一	三	六
和蘭	九	三	二	二
埃及	一	一	三	三
波斯	二	一	二・	二

以上の外更に左の國境貿易額あり。

年度	輸入	輸出
一九一七年	一三、五九、四二	一二、三二、五〇
一九一八	一三、二八、八〇	一三、六九、二八
一九一九	一四、八五、〇三	一五、二六、八〇
一九二〇	一六、〇三、一九	一五、一八、七八

本書印度に關する參考書目左の如し。

○奪はれたる亞細亞
○印度及び印度人
○印度南洋濠洲渡航案内
○印度渡航案内
○印度五千年史
○印度史
○印度史觀
○印度の現勢
○印度の古文明
○印度の現在及將來
○亞細亞大觀
○古代印度の傳說と神話
○印度經濟事情
○世界通
○時事年鑑

印度の鑛業

蒔田一枝

印度は恒河の大平原を初めとして到る處豊饒肥沃の地あり米麥黄麻綿花を産し其民衆の七割は農牧の業に從事せる一大農業國にして、鑛業の如きは農業其他の産業に比し微々たるものなり、今國民の職業別を掲ぐれば左の如し。

農業、牧畜業	二二四、六九六、〇〇〇人
漁業、狩獵業	一、八五五、〇〇〇
鑛業	二、三五一、〇〇〇
工業	三三、四六二、〇〇〇
交通業、通信業	五、〇二九、〇〇〇
商業	一七、八三九、〇〇〇
陸海軍	一、二七七、〇〇〇
自由職業	四、三七七、〇〇〇
宮公吏	五、三二五、〇〇〇
家庭傭人	四、五九九、〇〇〇
其他	一三、二二七、〇〇〇
合計	三一三、四七〇、〇〇〇

鑛業に從事する者は二百三十九萬人にして全人口三億一千三百餘萬人中僅に其千分の七に過ぎず又農業に從事する者に比すれば其百分の一に過ぎざる有樣なり。而して其鑛産額は年額約一億三千三百萬圓内外(一九一七年)にして他の産業に比すれば微々たるものなれども印度夫れ自身は種々の鑛物を産するを以て今後益々此方面に資本投下せられ、技術發達し、且つ設備完成するに於ては其將來は極めて有望なるものある